

第3回最上川水系流域委員会 庄内地区小委員会の議事概要

1. 開催日時

平成13年1月31日(水) 9:30~11:30

2. 場所

ホテルサンルート酒田(玉姫殿4Fラボーナ)

3. 出席者(35名)

委員:安藤與吉委員、池田勝良委員、角田分委員、加藤聡委員、
設楽京子委員、渋谷雄司委員、鈴木春男委員、前川勝朗委員、
水戸部浩子委員、吉泉欣一委員

国土交通省:神田酒田工事事務所長、菅原(河川)副所長、三原工務第一課長、
石山調査第一課長、佐藤河川管理課長、渡部酒田出張所長、
斉藤飽海出張所長、山川建設監督官、古関堰管理専門官、
石渡工務係長、高橋調査係長、土田洪水予報係長、土門技官

山形県:庄内支庁 後藤建設部長、土田河川砂防課長、高子技術主査、鷹濱技師
土木部河川課 菱沼企画調査主査

一般傍聴者:7名

4. 内容

- (1) 流域委員会の報告
- (2) 最上川の地域に対する役割・流域住民との関わりについて

5. 記者発表等

平成13年1月18日(木)

- ・酒田記者クラブ(11社)に小委員会開催及び傍聴希望について投げ込み
- ・水系内市町村へ小委員会開催及び傍聴希望チラシ配布
- ・酒田工事事務所ホームページより傍聴希望者を募集

平成13年1月31日(水) 委員会取材(2社)
山形新聞社、庄内日報社

6. 審議結果

(1) 流域委員会の報告

- 大臣管理区間について
- 知事管理区間について

質疑事項

○新たな水資源の開発の観点から、山形県内における多目的ダム計画があるのか。また、関係住民への周辺対策等について伺う。

A：村山圏域では、乱川の支川、留山川ダムとして現在調査中。

最上管内では、赤倉温泉の上流の最上小国川ダムとして計画中。

委員会等での費用対効果（B/C）として代替案、広範囲な意見に基づいて着手したいと考えている。

○景観の保全の観点から地域の景観に配慮するという統一見解について伺う。

A：21世紀の重要な課題として認識する。

山形県では景観のガイドラインが有るが、最上川の景観についても、酒田地域の声、観光面、歴史、風土性を考えて対処方針のガイドラインを作る上で懇談会などの設立が必要となってくる。

(2) 最上川の地域に対する役割・流域住民との関わりについて

○：

- ・最上川スワンパークは、白鳥と触れ合う子供たちの情操教育に役立っていると思う。
- ・周辺の環境づくりだけでなく、水と緑と花に触れ合える市民の広場として活用を図っていけばいいのではないかと思う。
- ・河川愛護モニターとして携わっていた当時から、最上川をいろいろな角度から観察してきたところであり、ゴミの量は軽減したが、発泡スチロールなどが非常に多くなったと感ずる。
- ・きれいな川づくりへは、市民一人ひとりの自覚と協力を得ながら、効果があらわれるように、行政関係機関の協力をお願いしたい。

○ :

- ・ 寒河江ダム完成後の最近の最大濁水記録について、教示願う。
A : データの確認をした上で、追って連絡することとしたい。
- ・ 最近の小牧川の河川汚濁について伺いたい。
A : 4年連続水質がワースト1ということから、実験的に農業排水路から導水して、冬季における水質悪化への改善策を講じるために、現在データを取りまとめているところであり、次回の発表に努力したい。
- ・ 最上川に携わる一住民として、地域の方々への啓蒙を図っているところであるが、まだまだ環境に対する住民の理解が足りないと思う。
国土交通省の広報等で、環境面についてPRを深めていただきたい。

○ :

- ・ 水質汚濁の問題の根本は、汚さないということの徹底であり、啓蒙することであると思う。
- ・ 川をきれいにするということは、小学校低学年（3年生）ぐらいまでの生活科、総合学習の中で、川に対する歴史、理科を学ぶ上で、発想を変えた学び方、材料をとらえて、地域の学校の周辺を利用する方法等、攻めの姿勢が大切であり、子供を川にどう近づけるかということを考えなければならないと思う。
- ・ 庄内らしさを出すには砂地、河口部といったものを前面に出した取り組みを考えなければならない。
- ・ 河口部での具体的な取り組みは、子供を近づけるための方策、大人が川にきて遊べるもの（ジェットスキー、ヨット）等、レクリエーションエリアと自然のエリアを橋の上流と下流に分けて作る企画を持ち出すべきと思う。

○ :

- ・ 川に親しむということに関しては、治水、利水という問題に加えて、私たち（大人）が子供の頃に接した最上川と、（今の）子供たちが接する最上川を比べても、川に親しみが薄れてきたというか、接しなくなったように思える。
- ・ 庄内と最上川の関係を考えると、絶対いじらない地域、そのまま残す地域を含めながら、最上川の河口というファクターを上手に利用することへのPRが必要である。
- ・ ある程度人工的なことを施すことによって白鳥がこれる環境をつくったということからも、親しみをわかせるようないい形での手段はないものかと思う。

○ :

- ・最上川229kmの流れの中で、筑後川、木津川のような川と共にある暮らしがきちっと守られている街がなかなか見つけることができないのは残念である。
- ・最上川は支川も含めて最上川であるという観点から、流域の人たちに最上川のことをもっと知ってもらうことの啓蒙が一番重要になってくるのではないかと思う。
- ・川に対する考え方というのが非常に柔軟に調整されてきたことから、各省庁間（国土交通省、文部科学省、環境省）の横の連絡をよくしたPRをお願いしたい。
- ・最上川の生態環境、景観を守ることから、伝統の工法というものを採り入れてもらいたい。
- ・上、中、下流の連携からも、川の流域に住む人たちのコミュニケーションなどもうまく図っていくべきと思う。

○ :

- ・洪水の危険はまだまだあり、洪水を防ぐということが大前提になる。
- ・農業用水の水利権に関しては、農業用水の需要その他の変化に伴って、利水面と併せた議論をすべき時期であると思う。
- ・河川敷その他の利用については、ゴルフ場はあまりいい利用法とは言い難い。
- ・下流の酒田では、公共下水道の整備が相当遅れていることから、もっと住民の意識の向上を図っていかなければならないと思う。
- ・きれいな川をつくるという観点から、市街地の川で泳げるようにとか、魚、アユが上るとかの目標を地域で持てばいいと思う。
- ・酒田の終局的な目標は、小牧川でみんなで泳ごうということの本気になって取り組むべきであると思う。（新井田川も同様）

○ :

- ・小国川漁業管内の上流部のダム計画に際し、ダムを造ることによって必ず沈下物が溜まることから、魚に対する環境の備えができていないのではないかと。どのような考えか伺いたい。

A : ダム計画に反対、水質の悪化、環境の悪化等の意見が出されているということから、地域住民に対する説明が十分でないところであり、今後、ダムを造るという視点で調査を進める上で、いろいろな方法（河川改修・放水路）を提案して、意見に基づいて決定を図っていきたい。

- ・自然の形を残すのが最上川流域の姿ではないのかと思う。いろいろな工事できれいになるのは、利水の関係から必要なものとして理解できるが、魚、水生昆虫等にやさしくないように見受けられる。

○ :

- ・ 自然的、社会的な状況に応じた形での、水との関わりが一番大事である。
- ・ 景観に関しての視点、演出、経験を踏まえて、地域の人たちの絆が深まっていくのではと期待する。
- ・ 一般の方々の意識を高めるには、ソフトラインだけでなくハードの部分も視野に入れて議論をされていかなければならない。
- ・ 画一的でなく知恵を出し合い、いろいろと試みを踏まえて、庄内地域の整備目標に向けた具体的な施策が出てくるのではないかと思う。

○ :

- ・ 月山ダムの取材に15年間関わってきているところであり、環境については破壊するという考えから新しく作っていくという発想が生まれていかなければと思う。
- ・ ダムの人工湖に対しての地域での維持、管理は、住民の支え、協力を踏まえて、失敗例等の資産というものを生かしつつ、住民に対する報告に踏みいるべきと思う。
- ・ 景観というのは街の品格を決める大事な視点であり、酒田の色（トーン）として、市民の意見の合意が、素敵な街づくりの基本であると思う。
- ・ 景観と川の汚れに対しては、事例報告を着眼点として、住民の意識と行動の切っ掛けづくりが大事ではないか。

○ :

- ・ 子供の水辺連絡協議会の話し合いの中では、最上川の縁に住んでいる家の子供たちは、あまり川に遊びに行かない、行かれる状態にないといった意見が出ている。
- ・ せめて子供たちの膝のちょっと上にくるぐらいの、歩いて遊べるような川、せせらぎの川の施設整備をお願いしたい。

○ :

- ・ 河川というのは様々な面があるので、いろいろな立場のポイントからよりよい方法を考え、コミュニケーションを行っていくことが重要であると思う。
- ・ 住民の意識、仕組みづくりにかかる意見交換も重要である。
- ・ 生態系に関しては、自然が持っている力というものを次の世代にいい形で伝えていかなければならないと、肝に銘じて進むべきと思う。

○ :

- ・ 河川というのは私的的概念として、山と海をつなぐものであると考える。
- ・ 庄内としての特徴を持たせる、海と河川とのつながりに期待したいと思う。